



室蘭工業大学

学術資源アーカイブ

Muroran Institute of Technology Academic Resources Archive



W.ブレイクの「エルサレム」について

| | |
|-------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| メタデータ | 言語: jpn 出版者: 室蘭工業大学 公開日: 2007-06-21 キーワード (Ja): キーワード (En): Jerusalem, imagination, Jesus Christ, Ulro, Satan 作成者: 安藤, 栄子 メールアドレス: 所属: |
| URL | http://hdl.handle.net/10258/198 |

W.ブレイクの「エルサレム」について

安藤 栄子

On William Blake's *Jerusalem*

Eiko ANDO*

(原稿受付日 平成9年5月9日 論文受理日 平成9年8月20日)

Abstract

Jerusalem: The Emanation of the Giant Albion seems to be very difficult to understand because of the lack of narrative movement and sequential development, therefore some critics seem to feel perplexed after having read it. However, the theme seems to be very clear: Albion's fall from "Imagination" into "Ulro" and his return to "Imagination." The aim of the paper is first to justify the reason why *Jerusalem* gives us the apparent confusion and chaos, and secondly, to elucidate what Blake wanted to say in *Jerusalem*.

Key words : Jerusalem, Imagination, Jesus Christ, Ulro, Satan

1. はじめに

William Blake (1757-1827)が活躍した18世紀は理性至上主義の時代であり、宗教は理神論が主流であり、キリスト教は一般的に不振であった。Blakeには英国民が「信仰」を捨て去ったように思えたのであり、英国民を覚醒させる目的で*Jerusalem*を執筆したと思われる。*Jerusalem: The Emanation of the Giant Albion* (1804-20)は100枚のプレートから成り、4つの章から構成される。第1章には"To the Public", 第2章には"To the Jews", 第3章には"To the Deists" 第4章には"To the Christians"という「序」がつけられてある。一見すると整然としているように見える

*Jerusalem*であるが、実は混沌としており、批評家を当惑させるようである。¹⁾ それはこの作品が主人公 Albion (英国と人間を表す)の"Imagination"から"Ulro"への墮落と"Imagination"への復帰と言うテーマを持ちながら、プロットが時間の流れに沿って展開しないからである。端的に言うと、「第4章」を読み終えてはじめて結論が分かるのではなく、Blakeの主張は「第1章」の冒頭で既に述べられてあると言えよう。すなわち Blakeは第1章でこの作品の中心となる"Imagination"と"Ulro"とに言及し、それ以後各プレートではこの2つの世界は並存して描かれるのである。我々は"Imagination"を垣間見た瞬間に突然暗澹たる"Ulro"にひきずり下ろされ、再び上昇し Jesus Christ

* 共通講座

と Jesus Christ が再臨するのは罪人を告発するためではなく、むしろ罪人と告発する "Satan" 「悪魔」の手から罪人を救いだすためである。⁴⁾ "Human nature is the image of God" (*Annotations To Lavater*, 554) と信ずる Blake には人間を善人と悪人、救われる者と救われない者とに二分し一方のみを救い、他方を捨て去るキリスト教の考え方は「悪魔的」と考えられたようである。これは彼の J. Milton (17世紀英国の puritan 詩人) に対する態度に一層顕著である。Milton は彼の叙事詩の中で人間の3つの種類に言及する。第1は「選ばれた人々」(「十戒」等の掟を厳守しうる聖人等) 第2は「救いが可能な人々」(罪を犯したが、悔い改めた人々) 第3に「救われることが困難な人々」(罪人など) である。第1と第2の人々には神の救いが約束されるが、第3の罪人には呪いと地獄のみであると言われる。⁵⁾ 以上のような puritanism の偏狭さを Milton の作品に見た Blake は憤慨し「救われることが困難な人々」こそ「十戒」を破りいかなる拘束にも屈しない「天才」と考えたのであり、Blake の描く Jesus Christ は全作品を通して罪人のような激しい性質を持つ。⁶⁾ Blake は人間を分類することに憤りをおぼえたのであるが、それは彼とキリスト教の考え方の相違によるものと思われる。キリスト教では人間は原罪を遺伝的に受け継いでいる不義なる存在であるが、この不義なる人間を救うために義なる神は一人子 Jesus Christ をこの世に送って下さった。Jesus 御自身は無罪であり、全人類の罪のため死ぬが、復活することで罪と死に打ち勝ち、Jesus に従う者に救いの道を開いて下さったのであると言われる。これに対し Blake は「原罪」という言葉を全作品中一度も使用せず、全く無関心の態度をとっているかのようである。さらにキリスト教では重要な教義である Jesus の贖罪死を Blake は認めていないようである。⁷⁾ Blake にとって Jesus の死は「自我」の死、「自我滅却」("Self-annihilation") を意味する。⁸⁾ Blake は「自我」を「悪魔」と呼び憎むが、それは人間の自己中心性のことであり、これが「理性」と結び付くことで特に破壊的な働きをすると考えたようである。"Good & Evil are here both Good & the two contraries Married." (*Annotations to Swedenborg's Divine Love*) と Blake は述べ善も悪も共に肯定するが、それは「自我滅却」の境地において可能である。Blake が大胆にも Jesus を罪人と考えたのは彼が善と悪との二元論を中核とする「十戒」を破り、あらゆるものを自分の思いを入れずに肯定する

"Imagination" に生きる人であることを強調するためであったと言えよう。Jesus は Blake にとって理想の人間であったが、同時に全宇宙に内在しすべてのものに絶対的な存在の意義を与え、さらにすべてを超越し一に融合させる神であるが、それは膨大なエネルギーのようだとされる。⁹⁾ 以上の説明から先にあげた「神の長い苦しみは永久ではない、審判がある」を考えてみよう。すなわち Albion が自己主張し本来一体であるべき Jesus と宇宙万物との関係を乱し、Jesus を苦しめるが、やがて真理に目覚めた Albion は「自我滅却」をはたし再び Jesus のもとに戻り、調和と平安が回復されることを述べたものと思われる。さらに Blake は Jesus の教えは "forgiveness of Sin" 「罪の許し」であることを以下のように述べる。

The Spirit of Jesus is continual forgiveness of Sin: he who waits to be righteous before he enters into the Saviour's kingdom, the Divine Body, will never enter there. I am perhaps the most sinful of men. I pretend not to holiness.

Blake によれば「天国に入るために義人であるか否かは問題ではない」のである。彼は自分のことを「最も罪深い人間」と告白し、そうであっても「神聖ぶらない」と述べる。ここに Blake 特有のトリックがある。通常義なる人は神聖な面持ちをしており罪人と対立する。「十戒」を破ることを奨励する Blake は義人から見るとあきらかに罪人である。しかし Blake にとって「罪」とは善と悪との二元論に支配され人を裁くことである。"holiness" 「神聖さ」に義人のもつ「偽善」を見抜いた Blake にとって義人であることがむしろ「罪」であったといえよう。以上述べてきたように Blake のこの作品における主張はほぼ語られたと言っても過言ではあるまい。これ以降 Blake は Imagination をそして Jesus Christ を描き続けるが、同時に対極にある Ulro の世界も浮き彫りにさせるのである。

3.

プレート4から第1章が始まる。Jesus は Blake に *Jerusalem* のテーマを与えるが、それは

Of the Sleep of Ulro! and of the passage
through
Eternal Death! and of the awaking to Eternal
Life.

である。"Eternal Life"とは"Imagination"であり、
 "Eternal Death"と言われる"Ulro"は「理性」一色の世界である。Jesusは彼のもとをさる Albionに"I am in you and you in me, mutual in love divine"と述べ、さらに"I am not a God afar off, I am a brother and friend; Within your bosoms I reside, and you reside in me: Lo! we are One, forgiving all Evil."と温かく語る。ここで強調されるのは Jesus と Albion の距離の近さである。Jesus は Albion にとって「兄弟」であり「友人」である。ここにはキリスト教でいわれる支配する神と支配される人間の関係はないといえよう。Jesus は「私はあなたの中にあなたは私の中に互いに聖なる愛に包まれて」と述べ、「あなたたちの胸の中に私は住み、あなたたちは私の中に住む」とのべる。
 "Imagination"の世界では神は神であり、人間は人間であるが、神は人間であり、人間は神であるといういわば「絶対矛盾の自己同一」の関係が成立するようである。しかし Albion は "We are not One: we are Many" と主張し、"By demonstration man alone can live, and not by faith." と述べる。Albion は「信仰」を捨てて「論証」を重視することで「理性」の世界"Ulro"へと墮落を始めたのである。Albion はさらに以下のように英国の山々を彼自身のものであると主張する。

"The Malvern and the Cheviot, the Wolds,
 Plinlimmon & Snowdon
 "Are mine: here will I build my Laws of
 Moral Virtue."

山は「人の知性や思想と関わる」¹⁰⁾ と言われるところから英国の思想界にも合理主義が入り込み、宗教は「道徳」にその座を譲りわたしたことが判明する。プレート5では合理主義の波が英国のあらゆる方面に影響を及ぼす事が述べられる。

The banks of the Thames are clouded! the ancient
 porches of Albion are
 Darken'd! they are drawn thro' unbounded space,
 scatter'd upon
 The Void in incoherent despair! Cambridge &
 Oxford & London
 Are driven among the starry Wheels, rent away
 and dissipated
 In Chasms & Abysses of sorrow, enlarg'd without
 dimension, terrible.

Cambridge 大学、Oxford 大学、大聖堂都市 London が "Starry wheels" に象徴される一律的な Newton 的宇宙論の影響を受け始めたと言われる。¹¹⁾ そして

Cam is a little stream! Ely is almost swallow'd
 up!
 Lincoln & Norwich stand trembling on the brink
 of Udan-Adan!
 Wales and Scotland shrink themselves to the west
 and to the north!
 Mourning for fear of the warriors in the Vale of
 Entuthon-Benython
 Jerusalem is scatter'd abroad like a cloud of
 smoke thro' non-entity.
 Moab & Ammon & Amalek & Canaan & Egypt
 & Aram
 Recieve her little-ones for sacrifices and the
 delights of cruelty.

と言われるように Cambridge を流れる Cam 川もいきいきとした生命感を失い、Ely 大聖堂を飲み込んだと言われる。Ely 大聖堂は Cambridge 大学の精神を支え、高める役割を持つが、それが Cam 川に飲まれたのである。キリスト教の啓示を否定もしくは疑問視する理神論が英国国教会を襲い、その生命力を破壊したのである。理神論の先駆的指導者 Edward Herbert は宗教すべてに共通する5つの本有的概念があると主張した。第1に神は存在すること。第2に神は礼拝されねばならぬこと。第3に徳行は礼拝の主要素であること。第4に罪の悔い改めは義務であること。第5に神の賞罰の行われる来世があることである。ほとんど道徳と同一であり、「神の賞罰」を主張する理神論は Blake には「悪魔」の宗教であった。Norwich も Lincoln も大聖堂都市であるが、それらが "Udan-Adan" の側で震えると言われる。"Udan-Adan" は "Ulro" にある「湖」で「理性」の持つ冷たさや不可解さを示すと言われる。¹²⁾ 英国国教会は完全に理神論に打ちのめされたのである。Albion が "Imagination" に生きた時は Wales も Scotland も区分されたまま調和を保つことができた。しかし Albion が "Ulro" に転落することで二つの地域は西と北とに分離しそれぞれの利益を求めることで争うのである。上の引用文の "Entuthon-Benython" は "Ulro" と同じ意味である。つまり想像力の欠如した「理性」一色の世界であり、一見合理的で明白に見える「理性」の「森」のような混沌とした状態を表して

ある。なぜなら Sons of Albion も Daughters of Albion もともに Albion と Los とを破滅させる「理性」を表すからである。本来同じ目的を持つもの同志なのに一方が他方に罠を仕掛け自らの力の中に治めようとするのである。これはおそらく「理性」の世界の特徴の一つであり、「女性」は「男性」と一つに結ばれることを拒否し、「女性意志」により「男性」を支配しようとするのであり、¹⁵⁾ 「男性」はこれに対抗し争うのである。Albion の 12 人の息子たちのうち 8 人は Albion の娘たちの奸計にかかるが、9 番目の Scofield は残る 3 人を自らの中に閉じ込め 4 重の力となり、奸計にかかった 8 人の息子たちも自分の勢力に巻き込んだのである。

ところで Albion の娘たちが織上げた「戦争と宗教の網」とはなんであろうか。まず「戦争の網」から考えたい。"Webs of war" の "web" は "net" とほぼ同じ意味を持つといえよう。"Net" は "the snares of sex" を意味するといわれるところから ¹⁶⁾ "webs of war" は女性がうわべの魅力で男性を虜にしてもお互いが自己主張し、各々の利益を求める限り本当の男女の融合はあり得ずただ争いが続くばかりであることを語っていると思われる。次に「宗教の網」とは何であろうか。

Jesus の教えは「罪の許し」であり、そこにはなんのかけひきも罠もない。「網」には人を騙し、おとし入れる悪意がある。Blake は「宗教の網」によって自然宗教である理神論を意味したと思われる。それはキリスト教の啓示、奇跡等の超自然的な要素をすべて排除したいわば「道徳」であり、確かに明白であるが、その透明な罠にかかると人は Albion のように善と悪との二元論に捕らえられ、掟を守り善を行う自分を正当化するために掟を守れぬ弱い人を罪人として告発するようなことを平然とやるからである。これではただ「自我」を無限に肯定するというおそろべき過ちに陥るという事実を Blake は看破したのである。

ところで Ulro にあって Blake は次のように宝石のようにきらめく真実を Los によって語る。

"And the Religion of Generation, which was meant
for the destruction
"Of Jerusalem, become her covering till the time
of the End.
"O holy Generation, Image of regeneration!
"O point of mutual forgiveness between Enemies!
"Birthplace of the Lamb of God incomprehensible!"

引用文の "Religion of Generation" は想像力の欠如した善と悪との二元論を中核とする宗教がすべて含まれる。しかしその「生成界の宗教」も Blake のいう真のキリスト教が開始されるまでは Jerusalem を守る「覆」となる肯定的に扱われるのである。しかも「聖なる生成界よ、再生の世界の像よ！」にはこの生成の世界に Imagination の世界が写しだされることが強調される。Albion が Jesus と分離した結果体験したことは「自我」に支配される苦しみであった。しかし Albion が Jesus に目覚め「自我滅却」をはたす時、「生成の世界」は Imagination の世界へと変貌を遂げるのである。プレート 1 で言及された Void から Existence への転換はここにおいてのみ可能である。しかし「自我」の嵐は再び吹きまくるのであって、Imagination の光を見た我々は再度 Ulro へと引き戻されるのである。

5.

Ulro での争いがつづいた後にプレート 12 にいたって Los は彼の炉に「神の指」が忍び寄るのを目撃する。彼は "I behold the finger of God in terrors!" とさげふ。神は「理性」の力がこれ以上 Los の炉におよばぬよう救いの手を差し伸べたのである。神の励ましに心を強くした「炉で働く人々」は Golgonooza の建設にのりだす。Blake は Golgonooza の場所をたずねる。それは最終的に Golgotha と関連づけられる。しかも "is that Calvary and Golgotha / Becoming a building of pity and compassion?" と述べ、Golgotha が「愛」と「哀れみ」の建物である Golgonooza であることが示される。すなわち無垢なるものが犠牲となり悲しみの涙を流すところに Golgonooza は建つのである。Golgonooza は実に驚異にあふれている。使われている石は「哀れみ」、煉瓦は「愛情」、瓦は「彫刻を施した黄金」、梁は「寛大」、モルタルとセメントは「正直の涙」、釘は「しっかりとっていて決して忘れられない言葉」、床は「謙遜」、天井は「献身」、炉は「感謝の祈り」であると言われる。一見して Golgonooza は Imagination に覚醒した人の精神界ではないだろうか。さらにプレート 13 には「門」、「通り」、「家」、「人間」が存在する「都市」としての Golgonooza が描かれる。しかしそれも現実的というよりは幻想的な性質をもつ。Blake

は T. Butts にあてた手紙の中で "Fourfold" 「4重」を「完全」の象徴として考えている。¹⁷⁾ Golgonooza には東西南北があるが、その各々の方位にも東西南北があって「4重」である。また Albion の4つの精神界である Eden, Beulah, Generation, Ulro がそれぞれの方位に存在し「4重」を示している。人間の「目」は「南」に、「鼻」は「東」に、「舌」は「西」に、「耳」は「北」に位置すると言われる。「東門」には Albion を自己中心的、破壊的な方向へ駆り立てていた「自我」のイメージ、「死」、「病」、「戦争」、「生成的なもの」がある。「東門」「南門」「北門」はすべて開いているが、「西門」だけは閉じている。つまり「4」つの「門」すべてが開放すると Albion は Imagination へと飛翔しうるが、「西門」の封鎖がそれを不可能としているのである。「西門」は「舌の門」でもあり「言葉」と関わるとされる。確かにプレート 40(36)で "Los built the stubborn structure of the Language, acting against Albion's melancholy" とあるところから合理主義に毒された言葉でなく Imagination からほとぼしる真実の言葉が Albion の救いとなることが示唆される。そして「西門」が開き Albion の「自我滅却」が実現した時には「東門」に描かれた否定的なイメージは破壊されずに 180 度転換して建設的、肯定的な意味を与えられるのである。

さらに Golgonooza は「悲しみと苦痛と憂鬱の国」と呼ばれる「27の天」に取り囲まれると言われる。「27の天」は「27の教会」とも言われ、"dogmatic Christianity" を意味すると言えよう。¹⁸⁾ Blake は「27の天」を3つに分類するが、第1は人祖 Adam から Lamech まで第2は Noah から Terah まで第3は Abraham からはじまり Moses, Solomon, Paul を含み Luther で終わる。第1は "giants mighty, Hermaphroditic" (*Milton* 37:37) と形容され、第2は "the Female Males, A Male within a Female hid as in an Ark & curtains" と形容され (*Milton* 37:528) 第3は "the Male Females, the Dragon Form" と形容される (*Milton* 37:528)。いずれも「男女両性者」、「雌雄同体」であるが Blake にとってそれは「相対立するものが妥協することなく常に戦争状態にある」という不安定で調和を欠くことを指すと思われる。¹⁹⁾ ユダヤ教はキリスト教に含まれており、「十戒」のもとに罪が告発されることを Blake は反対するのである。Paul は偉大なキリスト教の伝道者であったが、Blake はとりわけ彼の「性」にたいする敵意にもた感情（「コリントの信徒への手紙一」等）をみと

めることができなかつたようである。熱心な Luther は結局キリスト教世界を二分し争わせるだけの宗教改革者であり Blake には納得できなかったのであろう。

「罪の許し」を中心としすべてのものの調和を目指す Blake の真のキリスト教からみると「27の天」はいずれも争いを含む不完全なキリスト教と思われたようである。しかし

In all the Twenty-seven Heavens, number'd from
Adam to Luther,
From the blue Mundane Shell, reaching to the
Vegetative Earth.

The Vegetative Universe opens like a flower from
the Earth's centre

In which is Eternity.

と言われるように Blake は「27の天」を否定せず、それらの中に「永遠界」を見るのであり、それらは不完全であるが、Blake の真のキリスト教に到るプロセスとして存在すると考えられているようである。さらにプレート 13 の最終行から 14 の第1行目にかけて

For every thing exists & not one sigh nor smile
nor tear,

One hair nor particle of dust, not one can pass
away.

と述べ、「溜息」「微笑み」「涙」「髪の毛」などに示される人間の細かな感情を温かく受入れ、人目を引く偉業のみが後の世まで語りつがれるのではなく、目立たない人間の生きざまがそのまま永遠に存在することが強調されている。第1章は始めプレート 14 で終わりであったが、最終的にはプレート 25 まで延長された。そこでは Albion の息子たちの横暴を中心に Albion の苦悩が繰り返し描かれるのである。

6. むすび

以上 *Jerusalem* 第1章を中心に分析し Blake の意図を追求してきた。Blake は対立する2つの精神界に言及した。Ulro は理性一色の世界であり、これは合理主

義に支配される18世紀の英国そのものであった。Blakeにとってそれは「自我」に支配され、お互いが争う修羅の巷であった。理神論がその元凶であり、Blakeの攻撃の的となったのである。Blakeは人々がImaginationに目覚め、「罪の許し」を実行し宇宙万物との融和と調和を心から願ったのであり、一見すると大胆な彼独特のキリスト教を主張することで、全く不振だった当時のキリスト教に息吹を与えようとしたと思われる。

註

1) D.J.Sloss and J.P.R.Wallis, *The Prophetic Writings of Blake* (Oxford:At the Clarendon Press,1957), I, p.437.

S.F.Damon, *William Blake:His Philosophy and Symbols* (Gloucester, Mass.,Peter Smith,1958), p.185,p.195.

E.J.Ellis and W.B.Yeats, *The Works of William Blake* (London, 1893),II,p.176.

2) Blakeの絵はDavid Bindman, *The Complete Graphic Works of William Blake* (Thames and Hudson,1978)による。

3) Blakeの作品からの引用はGeoffrey Keynes ed., *The Complete Writings of William Blake* (London: Oxford University Press,1969)による。

4) *The Complete Writings of William Blake*, p.615.

5) S.F.Damon, *A Blake Dictionary* (Providence, Rhode Island:Brown University Press, 1965),pp.87-88.

6) *The Marriage of Heaven and Hell* および *The Everlasting Gospel* などに特に顕著である。

7) *Blake Records*,ed.by G.E.Bentley (Oxford: Clarendon, 1969), p.548.

8) *The Complete Writings of William Blake*, pp. 346-347.

9) 拙著 「ブレイクの「四つのゾア」について」 「イギリス・ロマン派研究」第18号(1994年)

10) S.F.Damon, *A Blake Dictionary*,p.260.

11) *Ibid.*,p.445.

12) *Ibid.*,p.416.

13) *Ibid.*, p.126.

14) *Ibid.*, PP.162-165.

15) *Ibid.*,p.447.

16) *Ibid.*, p.297.

17) *The Complete Writings of William Blake*,p.818.

18) S.F.Damon, *A Blake Dictionary*,p.85.

19) *Ibid.*,pp.181-182.